

戸隠地質化石博物館オープン！



戸隠太鼓によるオープニングの演奏



鷺澤市長の挨拶



開館のテープカット



戸隠小学校のマーチングバンドの演奏



内覧会の様子



戸隠地質化石博物館にぎやかにオープン!



去る7月26日、戸隠地質化石博物館の開館記念式典が行われました。博物館は旧柵小学校を利用した建物ということもあり、万国旗に紅白幕という、学校らしい"おめかし"で皆さんをお迎えました。

式典は戸隠太鼓の皆さんによる迫力ある演奏で始まり、鷲澤市長はじめ、多くの方々の祝辞をいただきました。花火を合図にテープカットが行われ、戸隠小学校マーチングバンドやギターとアコーディオンデュオのフレンチカフェによる演奏で、開館に花を添えていただきました。内覧会では地元の皆さんによる赤飯の振る舞いもあり、なごやかに門出を祝っていただきました。

平成18年3月まで柵小学校に通っていた戸隠小学校の皆さんは、「自分たちの学校がなくなってしまわずに、博物館として利用してもらってうれしい」と言っていました。フレンチカフェの美鶴さんは柵小0Bで、マーチングバンドの皆さんと柵小の校歌を合唱するという、うれしい演出もありました。また、展示見学ツアーでは「展示もいいが、学芸員の語りもいい」との好評もいただきました。

前日の夜遅くまで展示と開館セレモニーの準備に追われ、スタッフとしてはひやひやしましたが、たくさんの方々が新しい博物館の誕生を祝いに来て下さり、とてもうれしい一日になりました。



▲フレンチカフェと子どもたち

戸隠地質化石博物館の見どころ

戸隠は江戸時代から化石の産地として知られ、明治時代には多くの植物学者が活躍し、日本人が最初に学名をつけたトガクシソウ（トガクシヨウマ）が見つかった場所でもあります。まさに日本の博物学発祥の地です。

館に入るとまず、クジラの全身骨格や2トンの化石岩塊が出迎え、戸隠や長野が海だった時代へと誘います。海だった戸隠がどうして山になったのか？その疑問が出発点です。

疑問を抱いたまま3階へ上がると、第1展示室で、大型動物たちの化石がみなさんを待っています。日本で初めて、戸隠で見つかったダイカイギュウや世界最大級のシンシュウゾウの化石が壮大な過去のドラマを語ってくれます。その大きさに皆さん圧倒されています。

第2展示室では、戸隠を代表するホタテガイやサメの歯の化石、400万年前を再現したジオラマを

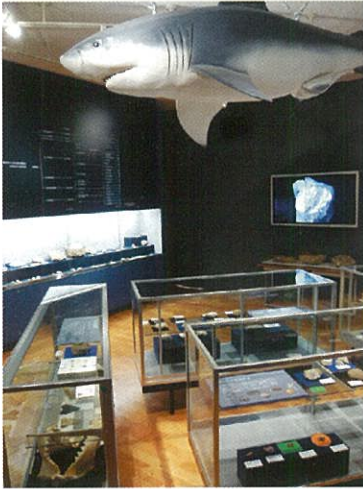


▲入館者を出迎えるクジラの全身骨格

前に、豊かな海だった頃の長野を実感されるようです。

第3展示室は、海だった戸隠が山になった謎を解き明かす場所です。さまざまなパネルや長野周辺の5万分の1の立体地形模型がそのカギです。

ここでは大地の生い立ちを知ることができ、アンケートでも一番人気の展示室です。



第4展示室では、生命の進化を辿ります。ヒトの頭骨に始まり、ゾウ、クジラ、恐竜、アンモナイト、三葉虫など様々な生き物の歴史を見ることができます。生きている化石のコーナーや触れられる展示も好評です。

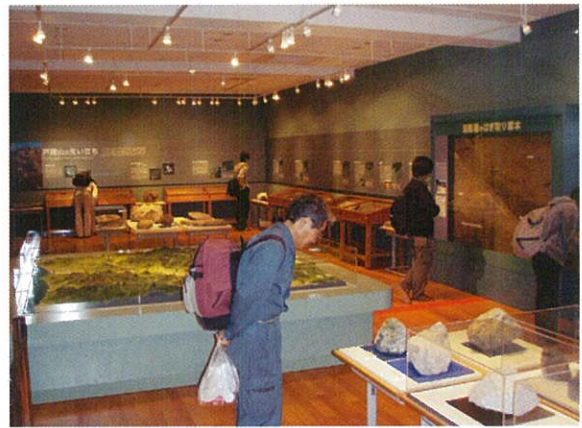
▲迫力あるサメが出迎える 第2展示室

第5展示室では今の長野の自然を中心に、いろいろな生き物の標本が学校の雰囲気を生かして展示されています。特に江戸時代の末、1850年頃の長野市周辺の山を描いた絵図とほぼ同範囲の現在の写真は、今と昔の様子を比較できる貴重な資料です。過去を知り、今を知ったら、未来に目を向けてもらいたい、この展示にはそんな願いがこもっています。

他にも学校の思い出を集めた学校資料室や皆さ

んとともに勉強をするためのワークルーム、魚やカエルを飼育している部屋、化石のクリーニング室や家庭科室、多目的室、図書室、企画展示室があります。学校の雰囲気を残したつくりや展示は、だれもが経験した懐かしい思い出をよみがえらせてくれます。

化石採集会などの活動もあって、アクセスの悪い中、開館から3カ月で8000人をこえる来館者がありました。来館者へのアンケートには、「長野が海だったことに驚いた」、「楽しかった。また来たい」という感想が多くありました。こうした感想に応えられるように、今後も「来館者とともにつくる博物館」を合言葉に戸隠の自然を生かした様々なイベントや企画展を予定しています。



▲人気の第3展示室

秋の企画展開催中！（～11月30日まで）

戸隠は博物学発祥の地として、多くの学者が訪れました。そして、たくさんの化石や植物の新種が発見された場所です。今回の企画展は江戸から明治、そして今へと続く戸隠と博物学の関わりを貴重な標本、資料、写真で紹介するものです。

物語は江戸時代から始まります。当時、様々なものを薬にする研究、本草学が盛んでした。戸隠産の化石や薬草も注目されていたことが文献に書かれています。本草学をもとに起こった博物学ブームでは、大名たちがいろいろなものを集めました。真田のお殿様の集めていた珍しい化石や美しい貝殻もその時のものです。

明治時代になると、植物学者が新種を求めて次々と訪れます。その皮切りとなったのは「トガクシソウ（トガクシショウマ）の発見」です。日本人が初めて学名をつけた植物のトガクシソウ、その輝かしい出来事の裏には、アメリカで最新の植物学を学んだ東京大学の教授と、江戸時代の博

物学を引き継ぐ本草学者との確執が隠されています。そんな人間ドラマを紹介するのも、今回の展示の目玉の一つです。また、明治時代に戸隠で採集された植物の標本が100年ぶりに里帰りしました。今では滅多に見られなくなった野生のウチヨウランや貴重な植物に出会うことができます。

さらに明治時代に盛んになった地学の研究についても、戸隠と関わりの深い多くの研究者の業績を紹介しています。他にも2005年に新種として発表されたコガタカワシンジュガイの変わった生態や、氷河期から生き残っている動物や昆虫についての展示もあります。これからも続く物語の舞台、戸隠と博物学の"縁"の深さをどうぞご覧ください。



▲トガクシショウマ



新収蔵資料紹介

博物館では、昨年の夏に一括して大量の民俗資料の寄贈を受けました。これらの資料は昭和30年代に小田切や鬼無里などの地域から集められた民俗資料で、その数はおよそ200点にのぼります。

現在博物館ではこれらの資料の整理を進めていますが、そのなかからいろいろと面白い資料が見つかっています。ここでは、そのいくつかを紹介したいと思います。

千曲市雨宮の土人形

200点以上の資料の中には大型の土人形もいくつかありました。その多くは中野の土人形でしたが、中に一点だけ中野のものとは違う土人形が含まれていました。それが下の写真の加藤清正です。

この土人形を発見したのは、たまたま博物館資料を調査にこられていた須坂高校教諭の宮村真一氏です。氏によると『雨宮県村誌』に幕末～明治時代に近藤弥佐治という人物が加藤清正の土人形を作っていたこと、その内ひとつを雨宮にある法輪寺に奉納したとの記述があり、実際に法輪寺に残されているものや、近藤氏の生家に残されている弥佐治の銘がある清正の土人形と彩色が同一であるので、おそらくは雨宮の土人形であろうとのことでした。土人形は別の場所に保管していたため、その日は写真だけでの鑑定でしたが、後日宮村氏からご教示いただいた、雨宮の土人形は底の



▲雨宮土人形(加藤清正像)

部分を土ではなく和紙でふさいでいるという特徴を確認したところ、その特徴が合致しました。

県内の土人形の産地は中野が唯一のものというイメージがありますが、かつてはそれ以外の地域でも土人形が生産されていたことを示す貴重な資料と言えるでしょう。

松本張子の天神さん

次も郷土玩具資料です。右上の写真のいくぶんすすけた感じの人形は、かつて松本で作られていて今はもう廃絶してしまった松本張子の天神様です。

宮村氏のご教示によると、松本張子は生産が途絶えてから長い年月が経ち、現在残っているものが少ないため、産地についての詳しいことがまだ十分に明らかにされていません。その特徴は首の部分が練り物(おがくずを練って固めたもの)でできているところで、張子と練り物を組み合わせた製法はほかには見られません。生産された時代は幕末から明治頃までの短い期間と考えられており、節句の祝いの飾り人形として売られましたが、同じような飾り人形で種類も豊富な松本押し絵雛や、明治になって埼玉県鴻巣から大量に流入してきた雛人形に押され、早い時期に廃絶してしまっただけです。

松本張子については松本市旧制高等学校記念館学芸員の木下守氏からもご教示いただきました。

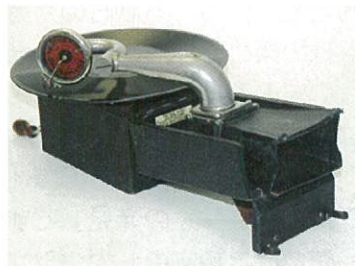
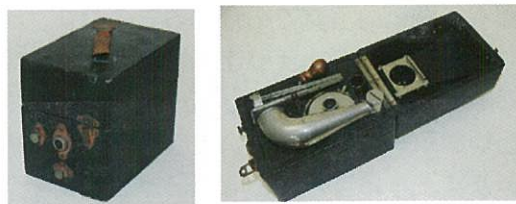


▲松本張子

コンパクト蓄音機"ピーターパン"

外見は黒い小箱(タテ17cm、ヨコ12cm、高さ15cm)、ふたを開けてみても道具箱のようにしか見えませんが、箱の中の部品を組み立てると、小さいながらも立派な蓄音機に変身します。ピーターパンという愛らしい名前がつけられているこの蓄音機は、1930年代にイギリスで作られたものです。

(細井雄次郎)



博物館のHP アドレス

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/index.html>

長野市立博物館

〒381-2212

長野市小島田町1 4 1 4

026 (284) 9011

戸隠地質化石博物館

〒381-4101

長野市戸隠新原3 4 0 0

026 (252) 2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301

長野市鬼無里和田沖・国道406号線沿い

026 (256) 3270